9.日日(にちにち)平安

9－1

Ｔにしてみれば、今乗りに乗っている俳優二人との口約束を遅まきながら十二月になって果たしたのは、単に共演したことだけが理由ではなかった。

役者と監督の二足の草鞋を履くことになって二作目の作品を撮るにあたり、同席している男優が準主役で起用された今月の一日にクランクアップしたばかりの映画の話題を食事がてら、それとはなしに俎上に載せたいという思惑もあってのことだった。

Ｔが探りを入れておきたかった映画とは、秀作を数多く発表してきた森田芳光監督が四十五年ぶりにリメークする黒澤明監督作品の『椿三十郎』であった。

偶然の悪戯と言ってしまえばそれまでのことだが、Ｔが温めてきた企画『人情紙風船』と『椿三十郎』とには、主人公は共に落ちぶれた素浪人で、仕官の口をなりふり構わず得ようとするとか、一歳違いの山中貞雄と黒澤明は東宝のスタジオで交流があって、山中脚本の『戦国群盗伝』を再映画化する際に、黒澤はシナリオを担当していたとか、構想を進めるタイミングも軌を一にしているとかなどが、申し合わせたかのように同調している。

とは言え、製作費や知名度を比較しただけでも、相当なギャップがあることは明かだったので、Ｔは当方の制作発表は『椿三十郎』の公開を見据えてから、先送りした方が得策であるかないかと逡巡していた。

ところが、Ｋと遭遇したことで映画人魂に火をつけられたＴは、躊躇いを捨てて思いのたけを打ち明けることになった。

たった今のＴとＫの話のやり取りを目の当たりにしていた長身の人気男優は、『椿三十郎』が無事にクランクアップしたことで気が緩んでいたのか、Ｔと夕食を共にしながら警戒心も持たないで聞かれるままに受け答えしていたあれこれを省みて、砂をかむような思いに駆られていた。

先ほど投げかけた「Ｔさんも人が悪いですね。～」の言い分を反芻しつつ、その口上の甘さを悔やんだ男優は「私もキャスティングしてくれないと後悔することになりますよ」と真顔で言い切った。

「ここにもう一人います」と脱ぎっぷりのいい女優は相乗りでもするかのように訴えた。

「こうなったら、まとめて面倒を見るしかないですね」とＫは冗談半分に言ってから、返答に詰まっているＴの表情を捉えて可笑しがった。

9－2

過熱気味なうえに急展開しすぎる映画制作談議に、一旦、間を置きたかったＴは「私の記憶では、Ｋさんは黒澤監督作品に出られたことはなかったような気がしますが？」と話題を変えた。

Ｔの口調にレコードの針飛びのような耳障り感は否めなかったが、「それが、一本だけあります。五十年程前に東宝で発生した労働争議が長引いたものですから、五社協定ができる前でしたので、黒澤さんも松竹でメガホンを取ることになったのです」とＫは記憶を辿りながら話し続けた。「ロシアの文豪ドストエフスキーが書いた『白痴』を土台にして舞台を札幌に変えて制作した同名の映画に、新人でしたので、ノンクレジットで出演しました」

「ノンクレジットでしたか！貴女が？信じられませんね！三船敏郎と原節子が初共演したことでも注目された話題作でしたね。当時、子役だった私でさえも、周りの業界人たちがざわついていたのを覚えています」とＴは感慨深げに言った。

「私は『白痴』と同時進行で撮っていた、黒澤さんがシナリオを書かれた作品『獣の宿』で本格デビューをさせていただきました。ですから、黒澤さんとの関わりは、映画が一本とシナリオが一本です」とＫは慎重に言葉を選んで言った。

Ｔが黙ったまま肯いて、濃い目にしたブランデーの水割りを三口で飲み切るとグラスの中の氷が鳴った。

ひと呼吸置いたＫは、「『獣の宿』は、『白痴』の二週間後に封切られました。奇しくも溝口健二監督の『お遊さま』や小津安二郎監督の『麦秋』なども公開された年で、巨匠揃い踏みの三作品の末席を汚させていただいた思い出深い作品です」と往時を偲ぶように語った。

大女優で文筆家でもあるＫの話に聞き入っていた今、もっとも脂の乗っていると言われている男優と女優は、銀座の一流クラブと呼ばれる非日常の場で、世界も認める三人の巨匠を身近に感じることができた。

新旧が入り混じる俳優たちがフィクションのパラドックスに共鳴し合う様相に、真紀は他の席へも顔出しをしなければと気を揉みつつも、極めてまれなことだが、そうはできないことへの焦燥感に駆られていた。

真紀とは別の理由で退席する機を逸していた横田も、半ば諦め加減で流れに身を任せていた。

9－3

パリの有名花店で五年間の修業の後、帰国して、銀座の中心部に『フラワーベッド』をオープンさせた令子の現在の年齢は四十代後半になるが、バックグラウンドは謎めいていて、真紀でさえ知らないことが多かった。

令子は、シャンソン『恋心』について口を挟んだきりで、映画人ならではの行き交う会話の端々を、シャンパンを上品な振る舞いで飲みながら楽しそうに耳を傾けていた。

「Ｋさんのデビュー当時の大船撮影所って、木造の西洋館が散在するモダンでお洒落な雰囲気を醸し出していたそうですね？」と令子はおもむろに、鋭敏な感性を持ち合わせていれば察知するであろう、微妙な沈黙の隙間を埋めるでもするかのように尋ねた。

「あら、誰にお聞きになったの？そう、そうなの。今でも目の前に浮かんでくるわ！特に春になると桜並木が見事なトンネルを作り、所内の誰もがお花見気分で浮かれていたわ。並木通りの右側には女優館、左側には男優館があって、活気にあふれていたわ。何と言ってもその頃は映画の全盛期でしたもの……」とＫは目を細めて、潤いを含んだ声で言った。

「少し話が逸れますが、黒澤さんの画コンテ（絵コンテ）を生で見せてもらったことがあります。確か、『影武者』、『夢』、『八月の狂詩曲』などでしたが、水彩絵の具やクレヨンで描かれた画コンテに感銘を受けました」と令子は好い加減でスパイスの利いたこぼれ話を付け加えた。

「誰に見せてもらったんですか？」とＴはチョット驚いて訊いた。

「よくご存じかと思いますが、野上照代さんです」

「野上さんですか、なるほどー、納得、納得です。……親しいんですね」とＴは、改めて令子をまじまじと見つめて言った。

「はい。今でも、いい距離間でお付き合いをさせていただいております」

「横田君、今の話聞きました……」とＴは言って、またもや画家に不意打ちをする。

「黒澤さんの画コンテのことですか？」と横田は不快の表情を押し隠すようにして、なんとか声を整えて言った。

「Ｋさん、大船撮影所は、今、どうなっているのですか？」と令子はスムーズにシフトチェンジして怪しい雲行きに助け舟を出した。

「撮影所は、丁度２０００年に閉鎖したので、今年で六年目になるかしら。今、跡地は鎌倉女子大学になっているわ… …。これも何かのご縁でしょうから、今度のＴさんの『人情紙風船』に夢と希望を託しましょうよ。キャスト以外でも私に協力できることがあれば、おっしゃって。ねぇ、皆さんもよ！」とＫは語気を強めて同席者に呼びかけた。

9－4

興に乗ると語尾が変わるＫの口癖に、同席者の誰もが可笑しがっていた。
この時とばかりにＴは「さすが千両役者！合点承知之助でござる」と時代劇映画の岡っ引きまがいの悪乗りでお追従を言う。
『椿三十郎』の一件では、Ｔの老獪なやり口にまんまとしてやられたが、結果オーライを良しとしようと思うことにした長身の人気男優は、「製作費の資金調達はこれからとのことですが、人を煙に巻くことがお得意なＴさんのことですから、既に目処がついているのは、あたりき車力のこんこんちきってとこですかね？」と敢えて地口まじりの江戸職人言葉で笑って訊いた。
「角川春樹さんに製作総指揮をお願いしてみようかな」とＴは嘯いてから、男優に向かって、「そうだ君が打診してくれるとありがたいんだが、どうだろう？」と答える代わりに、どうとでも取れる言葉を投げかけた。
「私にそんな力はありません。冗談はよし子ちゃんですよ！」と男優はギャグ系死語を捻り出して、無茶ぶりをやり過ごそうとした。
「お遊びはそれくらいにして、本題に入りましょう」とＫは半ば呆れ顔で促した。
その瞬間、Ｔの目の色が映画の撮影現場で本番のワンシーン・ワンカットのカチンコが打たれたかのように変わると、二人の女優を交互に見据えて「お二人に関しては、ピッタリの役どころが浮かんでくるのですが……」と言ってから眉間にしわを寄せて「君のタッパでは、時代劇にはそぐわないんじゃないかなー」と指で長身の人気男優に構図フレーミングをとりながら懸念を口にした。
「『幕末太陽伝』での石原裕次郎はどうでしたか？ましてやメガホンを取ったのは、彼の川島雄三ですよ！」と男優はＴの手カメラを睨んで、既に用意していた台詞を吐くかのように幾度となくハンディキャップを言われてきた長身は時代劇には不釣り合いとされているセオリーに抗弁した。
「君は、裕ちゃんよりデッカイいんだよ」とＴは困ったような顔で言った。
「私を『椿三十郎』にキャスティングした森田監督や角川さんは時代の寵児と呼ばれています。Ｔさんだって負けず劣らずなんですから、頑張ってください」と男優は回りくどい言い方をした。
「黒澤さんが山本周五郎の小説『日日平安』を忠実に脚本にしたのが『椿三十郎』で、主人公が地味すぎたから、最初は東宝側に却下されてしまつた。そこで用心棒の続編みたいに書き直すことになったそうだ」とＴは答えにならない裏話をした。

9－5

　話を的外れな内容に展開されたことで鼻白む男優に、次の言葉を用意していたＴは適切な距離感で話しを続けた。
「時代劇は用心棒物と人情物とでは、登場人物の色合いが違うんだ。原作の滑稽物に沿って黒澤さんが脚色した第１稿のシナリオが却下されなかったら、今度のリメーク版にしても、君はキャスティングされなかったんじゃないかな－－－。当然のこと『日日平安』は読んでいるよね？－－－そうか、一度目を通しておいても損はないよ。短編だしね」とＴは薄笑いを浮かべて言った。
　よりによってこんな時に、多事にかまけて原作を読まなかったことへのツケが回ってくるとは思いもよらなかったので、男優はＴに小馬鹿にされても甘んじるしかなかった。
「読んでおきます」と男優はシャンパングラスを目の高さに掲げて照れたように言う。
「例えば殺陣のシーンだったら、大男や小男が入り混じっても撮りようはあるが、貧乏長屋で住人と君との絡みをカメラのアングルやポジションを工夫して撮ったにしてもコメディだったらまだしも、悲劇的人情時代劇の色合いは出しようがない。分かってもらえたかな？」
「勉強になります。次回作で私の出番がありましたらよろしくお願いします」と男優は潔く言って頭を下げることで剣呑な空気の流れを押しとどめた。
　Ｔは表情を緩めて、今思いついたのか、ブランデーをシャンパンで割って、一口飲むとうんうんと頷き、皆にもそうするように勧めるので、同席者たちもこの際だからとＴに従うことになり、皆の分を真紀が作り終えるとグラスを合わせた。
「ママ、お抱えバーテンダーを呼んでもらえないかな」とＴは逸る気持ちを抑えられずに言った。
　顧客の性分を把握している真紀は、理由も訊かずに黒服を呼ぶと、バーテンダーの菜々緒に来るように伝えることを耳打ちした。
　典型的な二枚目俳優として、数々の浮名を流し、最近では伯父の性を名乗って監督業にも進出すようになったＴを、どこかで侮蔑していたＫは、彼の『人情紙風船』に纏わる広い見識を聞かされているうちに、これまでの印象を改めざるを得なかった。老境の域に達していても、人を見る目は危ういものだと遅まきながら痛感した。

9－6

　それぞれの思惑が錯綜している席に、一見してバーテンダーと分かる恰好をした菜々緒がやってくると、顔なじみだったせいかＴは彼女が名乗るのも待たないで、飲み物の中身について一方的に話すと真紀の飲みかけのシャンパングラスを渡した。
「急かせて悪いが、一口飲んでみてよ」とＴは声高に言った。
　微苦笑を浮かべた菜々緒は、事の次第を理解したのか、「奥深い味わいです。似たようなカクテルはありますが、こんなに贅沢な材料は使いません」と的確な感想を伝えた。
「材料か－－、そうに違いないが、材料選びも大事だからね」とＴはハイな気分が萎んでいく中で負け惜しみを言ってから、「折角だからカクテルのネーミングをつけてくれないかな。お願いするよ」と菜々緒に言った。
「お客様がつけてください」と菜々緒は頬を膨らませてＴに答えた。
「カクテル名ですが、(紙風船)では変でしょうか？」と菜々緒の困った様子を見かねた真紀は、ふと思い浮かんだ名前を言って、彼女が持ち場へ戻るきっかけを作った。
「ピッタリな名前ね。紙風船にしちゃいなさいな」とＫは特徴的な口角を挙げて言った。
「いいね！紙風船とはグッドネーミングだ」とＴは何かに急き立てられるようにして高言を吐いた。
「紙風船はフランス語でバロン・アン・パピエと言うの。日本語、フランス語どちらにしましょうか」とＫはネイティブのような仏語を交えて訊いた。
「当然、日本語でしょう！話は逸れますが、さっき迄ここにいたバーテンダーの菜々緒さんに向かって気障なセリフを吐いた輩がいるんですよ」と横田は割り込んできた上に筋が通らないことを口走って、ぎくしゃく感を引き起こした。
「その話、私が買います！」と脱ぎっぷりのいい女優は、横田の言動を制する真紀に逆らうようにして姉御口調で言った。
「絵描きさん、続けて、続けて」と話の腰を折られたＴは、ほうれい線を深めて無表情に言った。
「ありがとうございます。輩というのは私が世話になっている画商のことでして、常識人を絵に描いたような男なのですが、その時ばかりはタガが外れたのでしょうね、菜々緒さんに〝君の瞳に乾杯〟などとホザクのですから」と横田は画家然として語りながらも、自分もタガが外れていると酩酊状態でも感じていた。